53 睡次郎（にいぶいじらー）

睡次郎（にいぶいじらー）という男の子は大変貧乏者でね、その隣に大変美しい女の子ができていたって。そんで、この美しい娘をね、娘はよそからも大変好かれて、もうこの睡次郎というものは朝から晩まで寝たり起きたりばっかりしている。

隣の美しい娘がね、見ればきれいだし、自分の家庭なんかに及ばぬ娘とは思っていたが、あんまり美しいから、よその若い人からね、この美しい娘をみな欲しがっていたからね、自分も考えて、お母さんにね、

「白鳥、買って下さい」って、お母さんに頼んだって。そんで、お母さんがね、

「この白鳥を買うお金があればね、こっちは御飯食べるのも心配なのに、どうしてこの白鳥なんか買えるか」言うたらね、

「一生のお願いだから、この私にはどうしても白鳥を買って貰いたい、お母さん。一生のお願いだから」って母に頼んだって。こんな朝から晩まで寝ていた次郎が、こんなことを言うには何かひとつ理由が立つはずと思うて、このお母さんはとっても稼いで。

「三日は待って下さい。三日にどうしても白鳥を買うお金を作るからね、三日は待って下さい」と、子どもに、この息子に。一人息子であるし。

そんで、このお母さんは、白鳥を買うお金をあちこちから作るだけ作ってね、白鳥を買ってあげたらね、この白鳥を持って、翌晩、この隣のきれいな娘の家に大変大きなアカギ（トウダイグサ科）があったって。この木の上に上ってね、この次郎は。この白鳥を持って、それで、声を出して、

「こっちの娘を隣の睡次郎の嫁にあげないと、こっちの家庭はみななくなるから、よく聞け」。天からの神様の言いつけと思っているんだよ、こっちの両親は。庭に、こんな不思議なことにね、夜更けの月夜にね、天からこんな言いつけされるのを、神様からの言いつけだと思ってね。そんで、この娘の両親は出て聞いてるね。

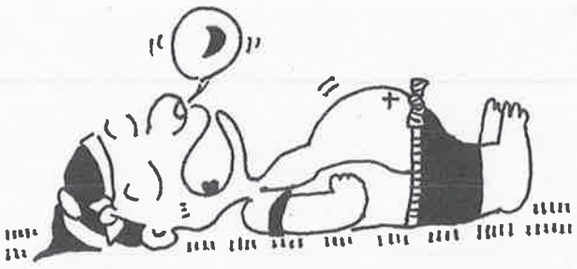
「こっちの娘はね、隣の睡次郎の嫁にやらないと、こっちの家庭はみななくなる、よく聞け」。そんな、自分で言って。言って、話して、後、この白鳥はぱっと天に放して飛ばしたわけ。

それでね、こっちの両親は本当かと、本当に神様の言いつけだと思うて、また翌日、隣の睡次郎の家に行ってね、

「どうか、私の娘をね、あんたの次郎と夫婦結びさしてくれんか」と頼みに来ていたって。それで、こっちの母親がね、びっくりして、

「何ということをおっしゃるんですか。こっちはね、お金は一銭もないし、食べるものもないし、親子二人暮らすのに大変精一杯なね。あんた方のこんなお嬢さんを貰う、こっちの、ないだから、ちょっと考えて下さい」言うんだけど、

「いや、夕べね、神様が言いつけだから、ぜひ貰って下さい」ってね。

それで、この睡次郎は、この娘を貰ってからはね、その翌日からは一生懸命、もう眠るのわからなくなってね、一生懸命働いて、大金持ちになったって。

字伊敷　新垣ヨシ